

曾我五郎仇討の太刀

はじめに

仮名本『曾我物語』巻八「太刀刀由来の事」には、箱根の別当が曾我兄弟に授けた刀劍の由来が語られている。別当は十郎には「木曾義仲の三代相伝」の三種の宝物の内の一つ「微塵」という短刀を、五郎には義経が平家追討のため西国へ向かう際に箱根に奉納したという太刀を授けたとある。なかでも仮名本に書かれた五郎の太刀についての話は、幸若「劍賛嘆」や平家物語「劍巻」との関係が指摘されているが、これらはそれぞれに全く異なる伝承を含んでおり、平家「劍巻」と仮名本『曾我物語』、幸若「劍賛嘆」の間には、どちらかがどちらかに基づいているといった、単純な影響関係では読み解けない錯綜した状況があるのである。今回はその状況の一端を明らかにし、仮名本『曾我物語』を取り巻く文化的な背景について言及したい。

仮名本曾我物語の周辺

まず、仮名本『曾我物語』所載の話を詳しくみていきたい。特に曾我五郎時宗に与えられた太刀についての物語をとりあげる。

源頼光が中国から刀工をよんで二尺八寸の太刀を作らせた。この太刀はその太刀風だけで紙を切ったので「てうか」と名付けられ頼信に伝えられた。頼信のもとでは五段四方の虫を切り落としたので「虫ばみ」と名付けられ、頼義のもとでは太刀が自然と抜けて御所に障りをなす大蛇を切ったので「毒蛇」と名付けられ義家に伝えられた。義家がこの太刀で宇治の橋姫を退治したので「姫切」と名を変え為義に伝えられた。為義がこの太刀とそれより長い太刀を並べて立てかけておいたところ、太刀が六夜にわたって切り合い、「姫切」が長い方の太刀を切り落としたので「友切」と名を変えた。その後保元の乱で為義が討たれると息子の義朝に渡り、義朝が鞍馬の毘沙門天に奉納した。義経が鞍馬にいた頃、夢の告げを受けてこの太刀を授かり、身を離さず持ち続けた。平家追討の大將軍として西国へ向かうことになる、戦勝祈願の為箱根へ奉納した。その太刀が引き出物として五郎に与えられた。

ここに書かれた物語は、太刀が名を変えながら相伝されるという点で劍巻を踏まえつつも、かなりの相違が認められる。「劍巻」が二振の太刀を相伝していく物語であるのに対し、仮名本『曾我物語』では一振のみであり、その太刀の改名譚の内容もかなり異なっている。『曾我物語』で頼光が中国から刀工を呼び太刀を作らせたとする部分は、「劍巻」で多田満仲が筑前から渡来人の刀工を呼んでつくらせたとするのを踏まえたと考えられる。「劍巻」では、二振の太刀は「髭切」「膝丸」と呼ばれ、それぞれ異なる経路をたどって頼朝の手に納まる。なかでも義経の手に渡り曾我兄弟の仇討ちで用いられたのは「膝丸」という太刀である。それが「蜘蛛切」「吠丸」と名を変え、為義の代に、熊野別当教真に婿引出物として与えられて源氏の所有を離れ、教真が熊野権現に奉納し、それが義経の手に渡り源氏に戻ってくるという構成になっている。義経は「薄緑」と太刀の名を変え、後に義経が梶原の讒言で鎌倉へ入れられなかつた時、頼朝の誤解が解けるようにと箱根に奉納したとされている。しかし、仮名本『曾我物語』の説では、義朝が平治の乱の時戦勝祈

願のため鞍馬に納めた太刀を義経が受け取るのであり、しかもその太刀は義朝から鞍馬を経て義経に伝わるなど、「劍巻」での相伝の系統とは無関係に展開する。そこに挿入される太刀の改名にまつわる物語も、「劍巻」からは離れた内容になっている。太刀がひとりで抜けて蛇を切り「毒蛇」と名付けられる話は平家重代の「抜丸」の話に類似し、義家が宇治の橋姫を退治した話は渡辺綱が一条戻り橋で鬼と対峙したという「劍巻」の、「髭切」から「鬼丸」への改名譚に通じる。為義のもとで太刀が切り合いをするというのも、「劍巻」で為義の代に「獅子の子」(元「髭切」)が新しく作られた太刀を切るという話と通じる。

仮名本『曾我物語』の物語は、「劍巻」や、『源平盛衰記』などの刀剣説話を引用したり要約したりして作られた切り貼りの物語ではなく、「劍巻」やその他の物語などにある刀剣伝承を素材として拾い、それを元に再構成されたものである。

同じように箱根の別当が兄弟に太刀を与えその由来を語る「劍賛嘆」では物語は天竺から始まる。天竺「よたう山」の「れううん」の滝にあった鉄の玉を「しやりふん」という者が八尺の長刀に打って持っていたが、「かううん」という者が盗み出して唐へ渡した。唐から日本へ伝わり、平城天皇の時代にこの長刀を太刀にせよという宣言があり、奥の舞房と三条小鍛冶の二人が召された。舞房は三年かけて三尺の太刀を作り、小鍛冶は三年三ヶ月かけて二尺七寸の太刀を作った。舞房より時間がかかった上、できた太刀は舞房より短かったので、小鍛冶は材料の鉄を盗んだ疑いをかけられ牢に入れられてしまう。小鍛冶が無念をはらして欲しいと神仏に祈ると小鍛冶の太刀「寸なし」が舞房の太刀「枕上」にきりかかり、切り合いの後「枕上」の切っ先を切りつめ同じ長さにしてしまった。「寸なし」は「友切」と名を変え、二振りそろって多田満仲に伝えられた。「友切」は罪人を斬った時、髭までも切り落としたので「髭切」、「枕上」は罪人を斬った時、膝をも切り落としたので「膝切」とそれぞれ名を変え頼光に伝わった。「髭切」は鬼の手を切つて「鬼切」に、「膝切」は変化の蜘蛛を切つたので「蜘蛛切」となった。その後義家の手に渡り為義に渡った。「髭切」は息子の義朝に、「蜘蛛切」は婿となった熊野の別当けうしゆんへ引き出物として渡され、後にけうしゆんから義経に渡された。後に梶原の讒言で鎌倉へ入れられなかった時、義経はこの太刀を頼朝との不和がなおるよう箱根に奉納した。

「劍賛嘆」は冒頭部分の異伝や太刀の命名に異伝があるものの、満仲の手に渡つてからの物語は大筋では「劍巻」と同じである。二振の太刀を相伝するという形になっているのも、「劍巻」を継承していると考えられる。「劍賛嘆」は、箱根の別当が引き出物の由来を語るといふ場面の設定が『曾我物語』と共通しているのみで、木曾義仲の刀の挿話が削られるなど、語られる内容は『曾我物語』とは離れた内容になっている。

こうしてみると、仮名本『曾我物語』の太刀伝承は、「劍巻」などの伝承とはまた異なる背景をもっているのではないか。そこで中世に流通していた太刀の伝承と比較して見てみたい。

銘尽の言説

中世には「刀剣伝書」と呼ばれる一群の書物がある。これらの書物に記された説は、同時代の文芸作品とも影響しあい、複雑な状況を作り出している。中には様々な伝承が含ま

れ、興味引かれるものも多いが、ここでは仮名本『曾我物語』巻八「太刀刀由来の事」と関わる伝承のみを扱うこととする。

曾我五郎時致の太刀

曾我五郎の太刀については複数の説が確認できる。鍛冶別に大まかに分けると五郎の太刀の作者を「長円」とする説、「助平」とする説、その他の鍛冶とする説となる。これらの鍛冶ごとの伝承は少しづつ性格が異なる。

長円 豊後国住人 後二和州二住スウ 注進物ノ内二入 此太刀ニテ曾我五郎

親ノカタキヲ打 和朝鍛冶記

長圓僧 判官箱根権現進ヲル、後曾我五郎持之云 義朝薄緑云太刀作之 薩州 佐々

木本銘尽

長圓 銘二八圓ノ字ヲサウニ円 カクノ如シ 劍梵字ヲカク ウスミトリノ作也 此

太刀右大将頼朝御弟九郎判官義経平家追討ノタメニ西国ヘサシツカハレシ時 スイフ

ン御秘蔵トテ進ランケルヲ 御夢想ノ子細ニヨリテ箱根権現工參賜ヲ 別當申ヲロシ

テ曾我ノ五郎時宗ニ是ヲイタス 此太刀ニテ建久四年五月廿八日工藤祐経ヲ打 此作

世ニ希也 宮元盛本能阿弥銘尽

長圓 めいには圓の字をさうに圓とつづ づるきにほんしかく づすみとりのさくな

り このさくの太刀 右大将頼朝御おと、九郎はんくわんよしつねへいけついはつの

ためにさくこくへさしつかはされしとき すいふん御ひさうとてまいらせらるゝ御

むさうの子細によりはこねのこんけんへまいらせ給ふを へつたう申しおろしてそ

かの五郎時宗にこれをいたす この太刀にてけんきう四ねん五月廿八日二くとうすけ

つねをうつ このさくよにまれなり 三好下野守本能阿弥銘尽

このように、長円を作者とする説は、おおむね、義経が箱根に太刀を奉納した理由を平家追討の為に西国へ派遣されたからとしている。これは奉納の理由を梶原の讒言によって隔てられた兄頼朝との仲直りのためとする剣巻や幸若とは異なり、仮名本『曾我物語』に合致する。また、「剣巻」とは異なる、義経が鞍馬の毘沙門天（多聞天）から太刀を授かったとする仮名本『曾我物語』の説も銘尽中に確認できる。

友成 備前国住人 … 九郎判官義経鞍馬多門天より感得之金作太刀此作也… 利永本

銘尽

友成 備前国住人 … 九郎判官義経鞍馬寺多門天ヨリ感得之金作太刀此作也… 伊勢

貞親本銘尽

友成 … 九郎判官義経くらまたもんでんより平家能登守教経所持同作也 鍛冶銘集

(『銘尽正安写本』刀剣博物館蔵)

友成作 … 又ミナモトノヨシツネクラマノ毘沙門 ヨリ給太刀モタカクラ此作也…

直江本銘尽

友成 … 九郎判官義経鞍馬山の多聞天より感得の金作の太刀此作なり 喜阿弥本銘尽

友成 … 九郎判官義経ノ鞍馬多門天ヨリ盛(感?)得 金造 此作太刀也 長享銘尽

これらの書物を直接の出典という意味で「典拠」としているとは言えないが、仮名本『曾我物語』がこのような説を素材として物語を組み立てているのはまず間違いないだろう。

長円の項に記された説が『曾我物語』との関連を思わせる一方で、助平の太刀はこのよ

うな箱根権現にまつわる伝承をもつておらず、おおむね記述も簡略である。

備前国助平 此八三平之第一ノ名物也 カノサクワ中子チイサク ヤスリ ミネマルクサキホソク ケンガシラナリ 曾我十郎五郎ヲヤノカタキウチシ太刀此作也 白河花山院之時代ノカチナリ 銘八 下二備前助平ト打也 此同名二人アリ 昔シ八平高ノ八平ト如此文字ノナリ真行二打ナリ 直江本銘尽

助平 備前国住人助平ト打 中子八切ヤスリノチトスチカフ 銘八目貫穴ノ上二打 曾我五郎時宗力親ノ敵ヲ打タル太刀ヲ造也 中子崎ソト八頭也 長享銘尽

助平(一条のいん 正暦の比) 備前国助平ほんめい如此 つかの身そりやすりちとすちかふ つかの身みしかし めいはめぬきあなの上二うつ 曾我五郎時宗ちゝのてきをうつ時の太刀これか作 ほうしやうのふところ太刀同作也 鍛冶銘集

助平 同国住人柄身チイサク横鑓也 峯ヲ丸クスル サキ細クソト八頭也 銘八目貫穴ノ下二打之 曾我五郎時宗力父ノ敵討ツ時ノ太刀彼造之 伊勢貞親本銘尽

助平 同国 めいうちやう備前国助平と打 つかの身きり鑓のすこしすちかふ めいはめぬきあなの上二うつ 曾我五郎時宗父敵をうつ このとき太刀彼造也 宮元盛本能阿弥銘尽

備前国鍛冶事 助平 目貫上銘打 一条院御宇永延比鍛冶也 丹後守藤原保昌懐剣云太刀造 當国同名兩人アリ 是八初助平 銘字大二長シ 目貫穴下打 切鑓多直焼也 中心短少ト云 ヨコヤスリソト八頭ナリ 峯丸シ 或説曾我五郎時宗太刀此造也ト云 佐々木本銘尽

助平 父宇多御宇 薩州波平住 或曾我五郎時宗敵打タル太刀此作云説在之 佐々木本銘尽

助平 備前国住人助平ト打 中子八切ヤスリノチトスチカウ 銘八目貫穴ノ上二打 曾我五郎時宗力親ノ敵ヲ打タル太刀ヲ造也 中子崎ソト八頭也 長享銘尽

その他にも、様々な鍛冶が五郎の太刀の作者として挙げられている。

我里 義家下向時力父賜之 後判官進之 箱根別當曾我五郎 佐々木本銘尽

伯耆国鍛冶事 真守 安綱子 大原真守打之 嵯峨天皇第十四勝宮皇子御剣作之 亦拔丸作之 目貫穴上峯二寄テ銘打 箱根別當曾我五郎時宗遣太刀此作云事アリ 亦平家重代拔丸二尺七寸此造ナリ 佐々木本銘尽

武里 彼作太刀 八幡太郎義家ト 秀安ト 位アラソヒノ時 奥州ノ守護ニフセラル力様ニテ下向ノ時帯之 建久四年癸卯廿八日 親ノ敵ヲ打 其後右大將殿取之 長享銘尽

これらの説の中には、箱根の別当から太刀をもらったということを書かないものが多いが、曾我五郎が仇討ちの前に箱根の別当から太刀を授かったことはよく知られていたであろうし、箱根に納められていた太刀が、奉納されるに至る経緯はどうあれ、義経の佩刀だったことも広く了解されていたのではないかと。よって、五郎が親の敵を討った太刀であると言つ刀剣伝書の記述は『曾我物語』の享受の上に成り立っていると考えてよかるう。このように、仮名本『曾我物語』の伝承と刀剣伝書の説は、完全に一致するものではないが、部分的に重なり合いながら展開しているものと思われる。

切り合う太刀

また、刀剣伝書には繰り返し同じようなモチーフがあらわれる。「剣巻」なども共通して見られる太刀同士が勝手に切り合いをする話もその一つであろう。仮名本『曾我物語』で曾我五郎に与えられた太刀についても切り合いの話がみられるが、それは刀剣伝書にもみられる。

助包 備前也。一条院御時の者なり。黒坂太郎宇治川を渡しける時帯せし太刀は此作なり。書に云つ。甲斐国黒坂太郎が宇治川を渡して峯へ登る処に敵に出合い、追いかけゆくうしろの方より敵一人来りけるを帯びたるを抜きてそとさまにぬき打ちに切りたりしに、鎧いたる武者鎧ながら二つに切られたりと云々。切り作りたる作者

鍛冶知らず。鬚切は伊予殿所持なり。太刀今一作そえて持たんと思召して、伯耆国より鍛冶をめされて作らせられたり。この太刀鬚切より少し延びたりとこころにかつて思召されけり。或日、日中ならべかけて置き給うに、轟鳴るをみれば、寸同じ長さになりけり。それより友切とぞめされける。かの太刀城奥州持ちたりしを討死の砌焼けたりけり。頭殿を是をめてして行次に焼き直させて大将殿御願法華堂におさめらる。又一の切れたる太刀は九郎判官殿箱根の御山に是を進ぜられしが、後別当曾我五郎にとらせて敵あまた討ちたりける。兵庫鎖の太刀是なり。其後頼朝公御手元に納まる。喜阿弥本銘尽

喜阿弥本銘尽は「髭切」について、太刀が切り合う話を載せている。そして「髭切」に切られた方の太刀が五郎に伝わった太刀だとしている。同じような説は他にもある。

行重 号舞草ト 此作ノ太刀スエホソクウスシ 三峯二作シ 中コハツチメ也 コト云ニ此作ノ太刀一フリ新ヒケキリトナツケテ源氏ニコレヲモツ 彼實次力作ヒケキト云太刀ニ キツサキヲ切ヲラレテ 後ニモトノコトクライヒタリケレハ ソレヨリ若草トナツケテ義家指之 子息六条判官為吉コレヲ傳へ 子息下野守傳之 義朝傳之 其後義経箱根ノ御山ニコメラル 別當曾我五郎ニコレヲヒク 此太刀ニテカタキノスケツネヲ切ケリ 其後此太刀ヲ頼朝ニメサレテ嫡子頼家ノ御舎弟實朝ニセツカイセラレテ後 頼家ノ子息悪房丸コレヲ傳へ 父ノカタキ叔實朝ノ此太刀ニテキラレ給ケリ

鍛冶名字考

鍛冶名字考 では実次作の太刀と行重（舞草）作の太刀が切り合いをして行重作の太刀が切つ先を切られたとあり、これは「剣賛嘆」で舞房と小鍛冶の太刀が切り合いをして舞房の太刀が切られたとあるのと関わりがありそうである。ここでもやはり、切られた方の太刀が義経の佩刀とされている。兄である頼朝に討たれた義経のあり方が、同じ持ち主の下にある仲間に切られた太刀に象徴されているのだらう。そしてそれは仇討ちを果たし非業の死を遂げた曾我兄弟の運命とも重ね合わされている。

「剣巻」は切られた方の太刀が平家に渡ったとしており、仮名本『曾我物語』は切った方の太刀が五郎に与えられているので、これら伝書の言説とは重ならない。にしても、手元にある太刀同士が切り合うという物語は、一族同士で争った源氏の歴史を象徴するかのようであり、やはり同じ一族同士の争いに端を発する曾我兄弟の仇討ちに、象徴的に重ね合わされているのであろう。さらに 鍛冶名字考 ではこの太刀が五郎の仇討ちの後頼朝の手に渡り、公暁が実朝を殺害するのに用いたとなっており、仇討ちにまつわる太刀として別伝が展開されている。そこでは父（頼家）を叔父（実朝）に殺された子（公暁）が父の敵を討つという物語になっており、公暁による実朝暗殺事件を曾我兄弟の仇討ちになぞ

らえてとらえるという歴史認識が伺える。ここでも、伝書類と『曾我物語』の関係は双方向的で、「剣巻」などの伝承を下敷きとする共通の文化的基盤があったのではないかと思われる。

木曾義仲の太刀

仮名本『曾我物語』では五郎に授けた太刀の由来が語られる前に、箱根の別当が曾我十郎に与えた鞘巻について簡単な由来が述べられている。そこでは木曾義仲には三代相伝の宝が三つあると言われ、龍王作の長刀、「雲おとし」という太刀、「微塵」という鞘巻（短刀）が列挙されている。この鞘巻は木曾義仲の三代相伝の宝であると言われているが、木曾義仲の佩刀についても他の軍記物のなかでは特に言及されることはなかった。しかし、刀剣伝書のなかでは、木曾義仲の佩刀はおおむね「安次（康次）」という鍛冶の作で、砺波山合戦の際に持っていた物とされている。

備中国鍛冶次第前後不同 康次 貞次力嫡子 木曾義仲ノ太刀ヲ作

家重 名八豊後国家重 安則 神息力子ト云 此作太刀保元合戦ノ時宇野七郎親治帯之 木曾殿面影比作之 行平力弟子也 長享銘尽

安次（一条のいん 正りやくの比）ひつちうのちう 木曾義仲となみ山のかつせんに此作の太刀をはく

安次（一条の御う）きそよしなか多つちうのとなみ山のかつせんの時此作太刀をもち給ふ 鍛冶銘集

安次 木曾殿砥浪山合戦の時所持の太刀是なり 喜阿弥本銘尽

康次 一条院御宇正暦比鍛冶也 木曾左馬頭義仲朝臣越中砥並山合戦之時此作太刀帯之 同名當国兩人云々 佐々木本銘尽

安次 或本云 木曾冠者義仲太刀作者 鍛冶名字考

以上は単に木曾義仲が砺波山合戦の際に「安次（康次）」という鍛冶の作った太刀を持っていたと述べるに留まるが、仮名本の本文には「木曾義仲の三代相伝」とあったのに近い内容を記す本もある。

康次 貞次力嫡子 伯耆権守ト号 後鳥羽ノ院ノ御宇作者 此作太刀為義 嫡子為教

帯之 嫡子木曾冠者義仲コレヲ譲与 嫡子清水冠者義高コレヲ傳 総頼朝佐ムスメ桜子ノ御ツホネニムコトリタマイテ後 カノ義高ヲタハカリテ カチワラ平三二仰ツケ

義高ヲウチ給フ時 此太刀ヲ頼朝ニメサル 頼家右大臣コレヲ傳 死去ノ後 相模ノ守義時コレヲ傳タリ 先代高時弘元四年五月廿日鎌倉三条ニシキノ小路兵衛督直義

カマクラヘ打入 高時打タマウ時此太刀ヲ取 尊氏ニタテマツル 尊氏持之 日本一ノ宝物也 鍛冶名字考

為教・義仲・義高という三代に渡って相伝された太刀という位置づけであり、『曾我物語』と同じように義仲から義高へ伝えられたとしている。

木曾義仲の太刀については、御伽草子「唐糸草子」にも木曾の重代に「ちやくい」という太刀があるとしており、他にも伝承があったことを感じさせる。

曾我十郎祐成の太刀

仮名本『曾我物語』は祐成の太刀についても巻十「五郎御前へめしいだされきこしめし

とはるゝ事」でこう述べている「それこそ、や、殿、よく聞け、平家にきこえし新中納言の太刀よ。八嶋の合戦に、いかがしけん、船中に取りわすれ給いしを、曾我太郎取て、九郎判官へ参せしを、義経、『神妙なり、さりながら、御分、高名して、とりたる太刀なれば、なんぢにとらする』とて給たる太刀也。奥州丸といふ太刀よ。祐成が元服せし時、曾我殿のたびたるぞとよ」。しかし、『平家物語』をはじめとする軍記物のなかにはこのような記述は見あたらない。まず、平知盛の太刀についての記述を探してみた。

藤戸 … 此作太刀平家新中納言知盛帯之… 鍛冶名字考

則恒 一条院御宇正暦之比 此作太刀平知盛持之 佐々木本銘尽

則常 或新中納言友成元暦二年三月廿八日八嶋 帯之 佐々木本銘尽

行国 十月番ノカチナリ 此作平家之一門知盛卿所持之劍 其後源ノヨリトモ從越後之國住人城之入道大連二給 直江本銘尽

管見に入るところ、三つの記事がみつかった。刀剣伝書の中には、『曾我物語』のような曾我太郎の手に渡る説話はみあたらないにしても、知盛の太刀について伝承が様々あったことがわかる。特に 佐々木本銘尽 の「則常」の項には、「新中納言友成（知盛の誤写か？）」「八嶋」で持っていたとあり、『曾我物語』の伝承との関わりが考えられる。

平家の太刀が義経の手に渡るといふ話も、例えば 直江本銘尽 の備前鍛冶系図「国宗」にはこのように見える。

… 清和天王ノ御代ノカチナリ カノ作 平家没落以後 源義経所持シテ 奥州下向ノ時 羽州ハクロニ ヲサメタテマツル

平家の誰が所持していたのかは書かれていないが、奥州下向の時に羽黒に納めたという部分は、仮名本『曾我物語』で知盛の太刀を「奥州丸」と呼んでいたことを思い起こさせる。何らかの関連があるのだろうか。

次に、曾我太郎から継子の十郎へ太刀が相伝されたという説はどうだろうか。十郎への太刀の相伝については別の伝承が残っている。それは実父の河津三郎の太刀が十郎の手に渡るといふものである。

友成 切ヤスリソト八頭也 後ニ此太刀曾我十郎打之云々 義経鞍馬八多門天ヨリ感得太刀此造也ト云々… 佐々木本銘尽

有綱 安綱力嫡子也 嵯峨天皇ノ御宇太刀刀劔作之 弘仁年中ノ作者也 此太刀卅五フリ刀卅コシ我朝ニ可有也 此作太刀伊豆ノ伊藤武者佐親コレヲモツ 子息河津三郎

佐宗コレヲ傳 赤澤山ニテウタレシ時コレヲウシナイ行方不知ナリニケリ 其後十七年ヲヘテ子息十郎太刀ヲ買トテ京都ニ上洛ス 四条町ニ立テ太刀ヲ問ケル程ニ 六十アマリノ入道云ケルハ 伊豆ノ伊藤佐宗最後ノ時ノ太刀ナリト 母ニ見セ申ニウタカイナキ佐宗ノ太刀ナリトノタマ 十郎ヒサウシテコレヲモツ 助経ヲ此太刀ニテウチ 其後大勢トキリアイテ 目又キヨリウチヲリタリケルヲ 頼朝メサレテウチツカセテ御ヒサウアリケリ 鍛冶名字考

ここに記された伝承は仮名本『曾我物語』の記述と一致するものではない。むしろ、何の関係もない伝承のように思われる。しかし、「四条町ニ立テ太刀ヲ問ケル程ニ」という一文は、箱根の別当から太刀の出所を聞かれたら、「四条町にてかひとりたるよし申さるべし」と言われたとある部分や、巻十で頼朝の訊問を受けた五郎が「京にのぼり、四条の町にて、鉄よき太刀をかひ取」と言っている部分と対応する。物語の一貫性があまり重視されてい

ない仮名本において、五郎の太刀をめぐる伝承は、珍しく首尾一貫した構造をもっているため、巻八で箱根権現から授かった太刀についての伝承は、一つのまとまった伝承として存在したものと思われる。幸若「十番切」でも五郎が処刑される場面でも「あら不思議や。あの太刀は一昨年京へ上り、四条町にて買ひ取り、夕べの敵を討つ。又、この太刀にて、某が首を切られんことの不思議さよと、上らぬ京へ上りたると申は、この太刀の出所を隠さんための言葉なり。」とあり、仮名本とほぼ同じことを言っている。これは幸若が仮名本に依拠したからというより、五郎の太刀について、仮名本と同様の、まとまった伝承を取り込んだからだと考えられよう。五郎の太刀については「剣巻」も敵討ちに用いた後に頼朝の手に納まったと言っている。その他の刀剣についても、五郎がまだ箱王と名乗っていた子供の頃、箱根権現で工藤祐経から与えられた短刀でとどめを刺すなど、刀剣は復讐と結びついて語られており、やはり、何かまとまった形で伝承が存在したことが考えられるのである。

刀剣伝書に採られた説は、こうした伝承を享受した結果であったかと思われるのだが、どうも鍛冶名字考や佐々木本銘尽の系統は『曾我物語』と何らかの関係があるように思えてならない。特に鍛冶名字考は『曾我物語』だけでなく、その他保元・平治の乱や源平合戦に関する記述も多く、軍記物との関わりが深いテクストであると言える。長享銘尽などにも名剣の持ち主として名だたる武将が名を連ねており、刀剣伝書と軍記物は深く関わっていると考えられる。

刀剣伝承の広がり

大永六年写の『天地三国之鍛冶之惣系図曆然帳』（『室町時代物語集』）という作品がある。そこに「剣巻」の影響下にあるらしい、しかし、相当に異なる伝承が残されている。多田満仲、剣を一儲とて、播磨に、安国、重弘とて、一人かち有、かれをめて、師範として、つるき一振打せて、御秘蔵最第一ナリ、有時、御心ちなや敷御座ス、夜に入、灯ほそくかゝけ、ふし給ふ、ものかけする所を、能々見給へは、たけ七尺計なる、大入道なり、御音をし給へは、見えず、しつまり給ふ時八、おそふなり、かれをたまして、しつまり給ふ時八、ゑたりやかしこしと、御そはをちかく参たり、件の御剣を、ぬくやおそかりけん、すそをはらりとなき給ふは、手こたへして、たうれたり、人をめされ、見せられければ、大なる蜘蛛ナリ、高キ事五尺計有、足八有、それよりかけろふ丸と言剣を打せ給ふ、御子頼光にゆつり給ふ、綱が鬼切しより、鬼切と名付給ふ、御舎弟河内守、御伝有しか、子細有て、はこね山へ籠給ふ、大江山にては鬼切、鬼神をしつめ、童子きりと名をかへ、かたき御剣ナリ

満仲の物語となつてはいるが、「剣巻」などの頼光の土蜘蛛退治の話を踏まえているのであろう、病で苦しんでいる枕元にあやかしが出てくる点も共通するし、「たけ七尺計なる、大入道」とあるのは「剣巻」の「長七尺計ナル法師」とあるのに対応する。太刀の相伝は、はつきりしないが一振だけの相伝だったように読める。「剣巻」の「膝丸」の物語にあるように箱根への奉納についても、「河内守（頼信）」の代とかなり遡るが、言及されている。「剣巻」にはない酒呑童子の話が入ってくるのは大江山絵詞をはじめとする、酒呑童子説話の影響であろうか。酒呑童子を切った太刀の号を「童子切」とするのは、現存する安綱作の太刀に、号を「童子切安綱」とするものがあることから、現在まで伝承さ

れてきた説であることがわかる。

この本には、鍛冶や刀剣について様々な説が展開されている。文芸作品の中にはあまりみられない、神仏が太刀を作ったという説や、後鳥羽院の番鍛冶の名前、天竺や中国の鍛冶の名などが書かれている。そして、この本に書かれた鍛冶についての記述のうちいくつかは、刀剣伝書の説と重なるのである。ただ、鍛冶の名や在国についてはほとんど記述がないことから、刀剣伝書ともまた異なる性格のものと思われる。

こうした作品の存在は、中世において刀剣の説が、刀剣鑑定のための専門知識の枠に収まっていなかったことを示唆する。巷間に溢れる物語は鍛冶の伝説として再生され、鍛冶の伝説は物語を増補・変容させるという双方向的な影響関係があり、その状況のなかで生み出されてきたものなのである。『平家物語』『剣巻』、仮名本『曾我物語』巻八「太刀刀由来の事」、幸若「剣讃歎」という太刀の伝承をめぐる物語も、こうした文化圏の一端に属するものだったのであろう。

おわりに

仮名本『曾我物語』、平家物語「剣巻」、幸若「剣賛嘆」という刀剣にまつわる物語と、伝書などその周辺に広がる文化との関係について、曾我兄弟の仇討ちをめぐる太刀を取り上げて考察した。仮名本『曾我物語』はその内容が饒舌で荒唐無稽であるといわれ、巻八の「太刀刀由来の事」も、「剣巻」の垂流の物語であるというような理解であったが、その内容を詳細に検討すると、「剣巻」や幸若よりもむしろ刀剣伝書などと近い文化圏で成立したのではないかと考えるようになった。しかし、刀剣伝書と『曾我物語』は直接的な影響関係にあるとはいえず、その間にはやはり物語類の享受があつたとするのが自然であろう。思うに刀剣伝書にある様々な説と「剣巻」などの文学作品は、その享受を通じて相互に影響しあう関係だったのでないか。「剣巻」の周辺やそれ以降の文学作品において、刀剣伝承があまりにも多様化し、混乱を極めていく状況は、背後に膨大な異説を生み出す文化の存在なくしては考えられないからである。

刀剣に関する説の流布も、埋只本能阿弥銘尽の奥書に「右此銘尽天下連歌ノ宗匠能阿弥太方」とあるように、連歌師などの人々が関与していた可能性があり、刀剣の知識が広い範囲にわたって必要とされていた背景が考えられる。仮名本『曾我物語』の物語はこうした時代背景の中での、「剣巻」の享受と変容の一齣なのである。